

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：23702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593247

研究課題名(和文) 外来化学療法を受けている高齢がん患者の療養生活支援システムの開発

研究課題名(英文) Development of the recuperation support system for elderly cancer patients who are receiving outpatient therapy

研究代表者

奥村 美奈子 (Okumura, Minako)

岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00233479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：外来化学療法を受けている高齢がん患者17名と外来学療法部門等で支援している看護職(5施設13名)に調査を実施し、その結果を基に、外来化学療法を受けている高齢がん患者が安定して療養生活を継続するための支援システムを検討した。考案された支援システム(案)は「治療継続のための生活基盤の安定を図る支援」、「安全・安楽に治療が受けられる支援(主に医療機関)」、「自宅での療養生活を支障なく送るための支援」、「外来化学療法を受ける高齢がん患者が生きる力を支え、その人らしい生活を送るための支援」の5つの目標から構成されている。

研究成果の概要(英文)：A survey was conducted on seventeen elderly cancer patients who are receiving chemotherapy as outpatients and a nursing staff (thirteen nurses from five institutions) who are working in connection with outpatient chemotherapy or other related departments. Based on the obtained results, we gave consideration to a support system that can help those elderly cancer patients subject to chemotherapy to lead a life of treatment sustainably. The proposed support system (draft) consists of the four goals of "support for stabilizing the life basis for sustainable treatment," "support (given mainly to the medical institutions) for receiving the treatment safely and comfortably," "support for leading a treatment life at home without hindrance," and "support for providing the will to live to the elderly cancer patients receiving chemotherapy in order for them to lead their own life".

研究分野：医歯薬学

キーワード：がん患者 外来化学療法 高齢者

1. 研究開始当初の背景

本研究は、加齢に伴う心身機能の低下に加え、生活基盤が脆弱になりがちな高齢がん患者が、外来化学療法を受けながら安定した療養生活を継続するための支援システムを検討することである。

2002 年の外来化学療法加算の新設、それに次ぐ 2004 年の算定基準の改訂などの社会制度の変化や、支持療法の進歩、薬物有害反応の少ないレジメンの開発を背景に、がん化学療法の場合は入院から外来へと移行している。一方、外来化学療法を受けるがん患者の中でも特に高齢がん患者は、加齢に伴う心身機能の低下や複数疾患の併発に加え、収入減少や近年の高齢者世帯・高齢単身世帯の増加による生活基盤の脆弱化などを背景に、患者が療養生活を継続する上で様々な問題や援助ニーズを抱えていることが予測される。そのため、高齢がん患者の特徴や患者が抱える特有の問題を捉え、支援する必要がある。

外来化学療法を受けるがん患者が抱える問題やニーズに関する先行研究として、福田(2003)、武田(2004)、鳴井(2004)、齊田(2009)の研究が認められ、外来化学療法を受けているがん患者は、薬物有害反応による身体的な苦痛をはじめとして、多様な問題を抱えていることが明らかになっている。しかし、これらの研究では調査対象者の中に高齢がん患者は含まれているものの、老年期に焦点化していないため調査対象者の平均年齢は 56.1 歳～61.8 歳であり、高齢がん患者特有の問題やニーズは十分に明らかにされていない。

以上より、高齢がん患者の実状や援助ニーズを明らかにし、その結果を基に、外来化学療法を受ける高齢がん患者が安定した療養生活を送るための支援について検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、外来化学療法を受けている高齢がん患者の療養生活上の困難や援助ニーズを明らかにし、その結果を基に、外来で化学療法を受けている高齢がん患者が安定した療養生活を継続するための支援システムを検討することである。

3. 研究の方法

(1) 外来化学療法を受けている高齢がん患者を支援する看護師への調査

看護師が捉えている外来化学療法を受けている高齢がん患者の実状や援助ニーズ、高齢がん患者であることを踏まえて実践している支援を明らかにすることを目的に、A 県内の「地域がん診療連携拠点病院」の外来化学療法部門、がん患者相談部門、地域連携部門に所属する看護師に面接調査を実施した。

(2) 外来化学療法を受けている高齢がん患者を対象とした調査

外来化学療法を受けている高齢がん患者の実状や援助ニーズを明らかにすることを目的に、A 県内の「地域がん診療連携拠点病院」で外来化学療法を受けている 65 歳以上の患者を対象に面接調査を実施した。

以上調査(1)(2)は質的帰納的に分析した。下記に記す研究成果では、分析結果で得られたカテゴリーを【】で示す。

(3) 調査(1)(2)の結果に基づき、外来化学療法を受ける高齢がん患者が安定して療養生活を継続するための支援システムを検討した。

4. 研究成果

(1) 外来化学療法を受けている高齢がん患者を支援する看護師への調査

面接対象者の概要

A 県内の「地域がん診療連携拠点病院」6 施設中 5 施設に所属する看護師 13 名に各 1 回面接調査を実施した。平均面接時間は 52

分であった。

面接対象者の所属部署は、外来化学療法部門 8 名、病棟と外来兼務が 1 名、地域連携・がん相談室 3 名、病棟 1 名であった。

がん看護に関連する資格取得者は、がん看護専門看護師 2 名、がん化学療法認定看護師 7 名、がん性疼痛認定看護師 1 名の計 10 名であった。

看護師が捉えている外来化学療法を受けている高齢がん患者が抱える困難

外来で化学療法を受けている高齢がん患者が抱える困難は 61 記述で、その内容は 10 に分類された。

外来化学療法という特徴から、患者は自宅での副作用の対応や体調管理などが求められるが、看護師は「セルフケアに関する説明の理解が遅く、忘れることも多い」「体調不良が進んだ状態で気づく」などから【老性変化に伴うセルフケアの困難さ】を捉え、【培ってきた価値観とセルフケアに関する内容】では「副作用を我慢することや迷惑をかけないことを良しとするため症状が悪化する」といったことが語られていた。セルフケアの困難さについては【独居の高齢者に関する内容】【高齢者世帯に関する内容】においても世帯の特徴と関連させて強調して述べられており、自宅でのサポートが得難い独居・高齢世帯の患者はより一層困難を抱えていることが確認できた。一方、【高齢の親子世帯に関する内容】【同居家族に関する内容】では、家族と同居していても高齢親子世帯のため患者が親を支援しなければならない現状や、多忙な子ども世代に迷惑をかけたくないという思いから必要な支援を得ていない状況が確認できた。

また【治療開始や継続に関する内容】【治療継続による経済的負担に関する内容】では、先の見えない治療を継続することへの患者の迷いやその思いを家族に伝えられない苦しさ、年金生活者として治療を継続すること

による経済的負担などを捉えていた。

【がん治療を受ける認知症患者に関する内容】では、点滴治療中の安全確保の問題や他患者への影響、治療決定に家族の意向が強く反映することにより生じる問題など、認知症で治療を受けることによる多様な困難が確認され、【遠方から通院する患者の支援に関する内容】では、かかりつけ医との連携が有効に行われていない等の現状が語られた。

高齢者の特徴を捉えて実践している支援

高齢者であることを捉えた支援は 110 記述で【高齢者がその人らしく生活するための支援】【治療が安全・安楽に受けられるための支援】【自宅での療養が適切に実施できるための支援】【患者・家族の思いを捉え、困難な状況の緩和を図る支援】【生活の基盤の安定を図る支援】の 5 つに分類された。

【高齢者がその人らしく生活するための支援】は、患者の全体像を捉え、自尊心を尊重し、生活の質を支えるといった内容であり、治療を受ける患者としてだけではなく、長い人生を生き抜いてきた一人の人として尊重し支援する姿勢であり、高齢がん患者への支援の中核をなすものあると考えられた。次に、患者の理解の確認や老性変化に応じた治療中の支援などを含む【治療が安全・安楽に受けられるための支援】は、主に治療室で実施される内容であった。また【自宅での療養が適切に実施できるための支援】は自宅でのセルフケアや不調時の対応、高齢患者が家族から必要な支援を受けられるための働きかけであり、通院や自宅での療養に支障を来さないようにするための支援であった。

【患者・家族の思いを捉え、困難な状況の緩和を図る支援】は、治療継続の悩みを抱える患者の代弁者となること、家族の負担を軽減することなど、外来化学療法を受ける高齢がん患者と家族への様々な苦悩に対する支援であり、看護師の深い洞察力や感性に裏打ちされた支援であった。【生活の基盤の安定

を図る支援】は、化学療法継続に伴う経済的負担への対応であり、患者が安定・安心して治療を継続するための前提もしくは基盤となる支援であった。

高齢がん患者の安定した療養生活に必要な支援や課題

外来化学療法を受けている高齢がん患者の安定した療養生活に必要な支援や取り組むべき課題は 41 記述で、その内容は【在宅療養を支援する公的・私的資源の活用】【医療制度の充実】【交通手段の対応】【適切な病床数の確保】【医療相談体制の充実】【がん患者の時間外・救急外来、電話の問い合わせに的確に対応できる体制】【移動介助ボランティアの増員】【患者・家族の休息や相談に利用できる場所の整備】【化学療法に関わる院内チームやマニュアルの整備】【外来看護の質の保障】と、院内外の看護師の連携や看護師のスキルアップを含む【看護職として強化すべき内容】の 11 項目に分類できた。

(2) 外来化学療法を受けている高齢がん患者を対象とした調査

面接対象者の概要

面接を実施したのは 17 名(男性 11 名、女性 6 名)、平均面接時間は 38 分、年齢は 65~69 歳 4 名、70~74 歳 6 名、75~79 歳 6 名、80~84 歳 1 名であった。また診断名は大腸がん 4 名、胃がん 3 名、胆管がん 2 名、膵臓がん 2 名、肺がん 2 名、十二指腸がん 1 名、卵巣がん 1 名、子宮がん 1 名、多発性骨髄腫 1 名であった。

がん化学療法に伴う不調

がん患者が体験している不調には、抗がん剤による副作用とともに、倦怠感・疲労感やふらつき・体力の低下を感じているという語りが多く認められた。

外来化学療法を継続することへの思い

高齢がん患者は、がん治療を受けることを【やるべきこととして受け入れ】たり、治療を受けられることを【治療への肯定的な思

い】として捉え【治療効果への期待】を抱いていた。一方で、がんに罹患し治療を受けることで他者との関係や自己の役割の変更を余儀なくされ【治療に伴う負の感情】を抱えたり、完治の見通しの立たない治療を継続することに対して【治療継続への葛藤や迷い】をもち、支援してくれる家族に対しても【家族への申し訳なさ】を感じていた。さらに、自分自身の生活が通院治療中心になっている現状や、治療のために他者の役に立つことができないことで【自己の生きる意味への問いかけ】をしていた。また、がんの進行を予測し【今後に対する不安】や【最期を見据えた思いを】を抱いていた。

治療継続の支えと患者の工夫や努力

治療継続の支えは、【苦痛が無いこと】や【医療費助成制度の利用】による経済的安定、【まだできることがあるという思い】や【自分で運転ができる】といった自立・自律が確保されている状態、家族や親しい友人などの存在であった。

また、体力維持のために食べるための工夫や食べる努力をし、気力や体力の維持に努めることで自立・自律の保持を心がけたり、今後の病状を見据えてかかりつけ医との関係維持に努めるなど、患者は治療継続のために努力や工夫をしていた。

治療継続をする上での要望

要望として語られた内容は少なかったが、主な内容は通院手段に関連することや相談支援体制の充実等であった。

(3) 外来化学療法を受ける高齢がん患者が安定して療養生活を継続するための支援システム(案)の検討

患者と看護師への調査結果を基に検討した支援システム(案)は「治療継続のための生活基盤の安定を図る支援」「安全・安楽に治療が受けられる支援」「自宅での療養生活を支障なく送るための支援」「外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きる力を支え、その

人らしい生活を送るための支援」の4つの目標と、それらを具現化するための具体的項目で構成されている。

「治療継続のための生活基盤の安定を図る支援」の具体的項目は、医療機関での相談支援体制の整備・充実と経済的安定を図るための各種制度の利用の2つである。「安全・安楽に治療が受けられる支援」は、安全・安楽に配慮した治療室での支援と看護師のスキルアップ教育の充実、休憩室や相談室の整備など、患者・家族が治療日を支障なく過ごすためのサービス提供である。「自宅での療養生活を支障なく送るための支援」は、在宅療養中のセルフケアや不調時に早期に対処するための支援であり、具体的には地域サービスの利用促進、かかりつけ医や地域薬剤師との連携、治療中のがん患者に適切に対応できるように時間外外来、救急外来の整備をすることである。

「外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きる力を支え、その人らしい生活を送るための支援」は全ての支援の基盤であり、看護師が外来化学療法を受ける高齢がん患者を多面的に捉えて支援できる能力を育成することで促進される。

今回検討した「外来化学療法を受ける高齢がん患者が安定して療養生活を継続するための支援システム(案)」については、今後外来化学療法に携わる看護師と共有し、検討を重ねることで、内容の追加・修正を図る必要がある。

5. 主な発表論文等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥村 美奈子 (OKUMURA, Minako)
岐阜県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：00233479

(2) 連携研究者

布施 恵子 (FUSE, Keiko)
岐阜県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：80376003

宇佐美 利佳 (USAMI, Rika)
岐阜県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：10516850

浅井 恵理 (ASAI, Eri)
岐阜県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：40766408

森 仁美 (MORI, Hitomi)
岐阜県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40326111

文献

- 福田敦子, 山田忍, 宮脇郁子 ほか (2003). 外来化学療法患者の生活障害に関する研究 - 消化器がん患者の生活支障の実態調査 - . 神戸大学保健学科紀要, 19, 41-56 .
- 武田貴美子, 田村正枝, 小林理恵子 ほか. (2004). 外来化学療法を受けながら生活しているがん患者のニーズ. 長野県立看護大学紀要, 6, 73-85 .
- 鳴井ひろみ, 三浦博美, 本間ともみ ほか. (2006). 外来で化学療法を受けている進行がん患者の看護援助に関する研究 (第1報) - 外来で化学療法を受ける進行がん患者の心理社会的問題 - . 青森県立看護大学雑誌, 6(2), 19 - 26 .
- 齊田菜穂子, 森美和子. (2009). 外来で化学療法を受けているがん患者が知覚している苦痛. 日本がん看護学会誌, 23 (1), 53 - 60 .